

近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育 ——その理論的検討と歴史社会学的分析枠組みの提示——

佐々木 啓子

The Class Culture and the Education of the Upper Middle Class City People in Pre-War Japan

—The Presentation of the Frame of Reference of Sociological History—

Keiko SASAKI

Abstract

The aim of this article is to present the frame of reference of sociological history on the class culture and the education of the upper middle class in pre-war Japan. In modern societies, feudal statuses are substituted for meritocratic positions by new privileged class, that is, public servants, professions or the managerial class. These positions are acquired by licenses or education but not by one's social origin. Generally speaking, upper middle class city people know the importance of the educational background and give their children higher education which is acquired through their class culture. In this way, their meritocratic positions are inherited to their sons or daughters by hidden cultural capital.

Keywords: upper middle class, class culture, cultural capital, social reproduction, educational background

1章. 問題提起

本研究の目的は、近代日本における都市中上流階級 (upper middle class) の階層文化¹と教育の関連を、教育機関における学校文化および生徒の出身階層との関係を軸として明らかにしようとするものである。

筆者は、これまで戦前期の女子高等教育における出身階層の問題²や、首都圏の女子ミッション・スクールでの上中産階級の階層文化と教育の関連³についての実証的研究をしてきた。

そうした分析によって新たな問題として浮上してきたのが階層と居住地と学校選択の問題であった。すなわち、子女に最上の教育を授けようとする「上流階級」は、い

かなる住居地に住んでいようと隣に適切な学校がなくとも、あらゆる手段を用い、情報収集とそのネットワークを駆使してそれを実現している。一方、マージナルな層、すなわち「中間階級」では、それを可能にさせる居住地や文化圏が規定要因として機能していた可能性があったのである。そこで本論では、階層文化と教育の関連を理論的に整理するとともに、実証的レベルの研究に対してどのような分析枠組みが提示できるかを検討することを目的としている。

2章. 先行研究について

日本における階層文化と再生産に関する研究は1980

Received on September 2, 2011.

電気通信大学情報理工学部, 共通教育部, 総合文化部門

¹ 本論では、階層文化を扱うが、用語としては適宜「中上流階級」のように階級 (class) を充てる。

² 佐々木啓子：戦前期女子高等教育の量的拡大過程，東京大学出版会，2002

³ 佐々木啓子：女子ミッション・スクールの階層文化と教育，第55回教育社会学会発表要旨，2003

———：戦前期女子ミッション・スクールの進学構造，第56回教育社会学会発表要旨，2004

———：戦前期青山女学院の階層文化と教育，第57回教育社会学会発表要旨，2005

年頃より欧米の理論を援用しつつ実証的研究が社会学および教育社会学の研究者を中心になされてきた。しかし、その概念もさることながら、日本社会においては、階層文化の内実が、そもそも確認されているわけではないし、階級、階層に対する人々の認識も高くはない。むしろ明治以降の日本が歩んできた近代化の道は、前近代社会における身分制を崩壊させ、「属性原理」を「業績原理」に転換するプロセスであったため、身分や出自等に代わって社会的地位達成に重要な意味を持つ職業資格や学歴の研究に関心が高まった。したがって、近代化と同時に伝統的身分文化が完全に崩壊してしまったという認識からは、社会的地位の世代的継承よりも、新たな社会的地位の獲得や地理的移動をとまなう社会移動に関する研究が大きな意味合いをもち、また一般にも受け入れられてきた。

明治以降、それまでの武士を中心とする支配層の身分や出自に取って代わり、近代社会の諸制度のなかで社会的地位を保証されたのは、教育や職業資格を手に入れた人々であり、彼らは官僚、専門職、法人経営者などの近代的なエリート集団を形成したのであった。西欧社会に比べて短期間で近代化を推進しようとした日本において、政治、行政、軍事的エリートの養成は喫緊の課題であり、少数精鋭主義にて欧米留学と外国人教師の招聘によって、教育制度を整備し、その修了者を近代国家の建設に重要な地位に配置したのであった。

こうした社会的地位達成の手段としての教育と社会階層との関係については教育社会学の歴史研究において多くの研究蓄積がある。たとえば、麻生誠は明治期日本の大学が果たした人材養成の機能を、帝国大学出身者の出自を詳細に分析し、学歴によって地位を獲得した学歴エリートが次第に近代日本の政治・経済・社会の中核部分で地位を獲得していく過程を実証的に明らかにした。⁴

しかし、近代日本の学校教育は必ずしも社会に重要な人材養成に限定されていたわけではない。明治初期より慶応義塾などの私立の教育機関では、特に地方の富裕層の子弟など、教養のために上京して高等教育をうけた者も少なくなかったのである。こうした地位獲得以外の目的をもつ学歴のことを、天野郁夫は、学歴の「地位表示機能」として、地位獲得のための「地位達成機能」と識別して論じたのであった。⁵

この学歴の「地位表示機能」というタームは男子よりも女子の学歴研究において有効であった。天野正子は戦前期の女子高等教育進学者の出身階層が極めて高かったことに着目し、高等教育に進学する女性の家庭環境を調

べ、そうした上級学校に進学させるだけの経済的に裕福な家庭の出身であることを示すという意味で戦前期の女子の学歴は「地位表示機能」をもっていたと結論づけた。⁶すなわち天野正子は学歴を取得する意味が男性のそれとは異なり、社会的地位を獲得する目的ではなく、その所属する家庭の経済状況や階層の文化を表示する手段としての学歴資格であると論ずるのである。

もう一方で天野正子は戦前期のエリート男性と結婚した女性の出身階層と学歴を調査し、女性たちがその出身階層と学歴に見合った男性と結婚することによって、その所属する階層を継承させていたことを解明した。天野正子の一連の研究によって女性は婚姻により出身階層の文化を再生産させていたとして、女性を軸とする「階層文化の再生産」という研究の道が拓かれたのであった。しかし、天野正子の研究では戦前期の女子の教育機関が大都市、特に東京に偏在していたことについては言及をしていない。地理的な制約によって高等教育進学を断念した地方出身の女性たちに比べれば、東京出身の女性たちは学歴取得には極めて有利な状況にあり、その優位性は男子以上であった。⁷

では近代資本主義社会の枠組みのなかで、日本の階層文化と教育の問題はどのように扱われてきたであろうか。前述のように、明治以前の身分制に代わる近代日本の階層構造については、政治史、経済史の領域から次第に社会史研究へ、そして教育の歴史社会学的研究へと広がりをみせた。特に1980年代以降の研究によって明らかにされたことは、明治期にほぼ確立された官僚制機構と第一次世界大戦後の日本の産業資本主義の進展は、東京を中心とする「新中間層」の興隆とその拡大であった。この集団は、官公吏、軍人、医師、弁護士、管理職などの、専門職あるいは官僚的組織従業者で構成され、その社会的地位が学歴や職業資格によって達成されるという点で、近代以前の政治、経済の指導者層とは異なる出自の人々で構成されていた。「新中間層」として括られるこれらの人々は都市を中心として居住しその生活様式および価値意識や子女に対する教育において特徴的であった。

3章. 文化資本論と再生産論について

こうした日本の階層文化と教育の研究に大きな影響を与えた海外の研究について最初にレビューをしておきたい。

日本に階層文化あるいは文化資本という用語が移入されたのは1980年代、宮島喬らの翻訳によるフランスの

⁴ 麻生誠：大学と人材養成，中公新書，1970

⁵ 天野郁夫：近代日本高等教育研究，玉川大学出版会，1989

⁶ 天野正子：女子高等教育の座標，垣内出版，1986

⁷ 佐々木啓子：戦前期女子高等教育の量的拡大過程，東京大学出版会，2002

社会学者ピエール・ブルデューの文化的再生産論の研究であった。

今日では古典的となっているピエール・ブルデュー&クロード・パスロンの『遺産相続者たち—学生と文化』(1964/1996年, 石井洋二郎監訳, 藤原書店)は、高等教育、特にフランスにおけるグランド・ゼコールの学生の、出身階層による明らかな不平等を、経済的理由や才能といった要因に起因させるのではなく、生まれ育った家庭の文化的なレベルが、あたかも資本のように利益を生み、子世代に遺産のように相続されていくプロセスを実証的に明らかにしたもので、いわば、文化資本論研究の原型がここに見られるのである。

次にP.ブルデューらが明らかにしようとしたのが、高等教育と経済構造を視野に入れたマクロな分析であった。それは「教育システムと経済—学歴=資格と職業」(1975年, ピエール・ブルデュー&リュック・ボルトンスキー, 1985年5月, 森重雄訳)として、『現代思想』(1985年12-13)のなかで紹介された。その後、『再生産—教育・社会・文化』(1970/1991年, 宮島喬訳, 藤原書店)、『ディスタンクシオン I、II』(1979/1990年, 石井洋二郎訳, 藤原書店)と、1980年代から1990年代に次々と著書が翻訳され、日本の社会学および教育社会学の研究に大きな影響を与えた。

P.ブルデューは、通常の資本である経済資本に対して、学歴資本、文化資本、象徴資本、さらには社会関係資本といった用語を作り出し、それらが価値を与えられ意味付与されることによって利益をもたらし、さらに人々に承認されることによって正当化され、それを担う家庭を通して各個人に身体的に蓄積され、その子どもたちに継承されていくという。その過程に実は業績主義的な選抜試験が介在している。一般に選抜試験は本人の能力あるいは努力によるものとされるが、この選抜方法には多分に階層間の不平等が認められるのである。そのことをP.ブルデューが鋭く突き、こうした一見、業績主義的な選抜試験に対して、特定の階層、すなわち高い文化資本をもつ家庭の子弟に有利になるように仕組みられ、それが隠蔽されていることによって、その選抜試験を突破した者は、それがあたかも本人の真の能力あるいは努力の証として示すことを可能にしているのである。

このP.ブルデューの理論をもとに1990年代には宮島喬、藤田英典(1988, 1991年)らが日本における文化資本と階層文化の実証的研究を行い、その理論の妥当性が議論されたのであった。(藤田英典・宮島喬他「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』第27巻, 1988年, pp.51-89, 宮島喬・藤田英典編『文化と

社会』有信堂, 1991年)

こうした社会学および教育社会学の領域における文化資本論と階層文化の再生産論の実証的研究をふまえながら、本論ではさらに、A.ギデンズの資本主義社会の構造化理論、そしてM.ウェーバーの都市に関する理論を検討しながら、日本における中上流階級の階層文化の形成過程とその蓄積と継承について、主に東京という居住区域における歴史社会学的な分析枠組みを提示したい。

4章. 大都市居住と階層・階級

1. 都市社会学の分析視角

社会学の一つの領域である都市社会学の分析視角において、空間と階層・階級の関係について検討してみよう。

M.ウェーバーは『都市の類型学』⁸において、古代から中世の都市を検討し、常に都市外から都市に流入を容易にする経済的理由があるが、その都市の内部においては、概して都市は身分的平準化の傾向よりもむしろ身分的分化を強める傾向が優勢である⁹と結論づける。

こうした都市とそこに住む人々の身分、階級、階層性との関連性についての研究としては、アメリカ合衆国のシカゴを中心とする人口流入問題やイギリスにおける労働者階級に焦点を当てた居住パターンの研究といった先進資本主義国における大都市形成過程の研究に多くの蓄積がある。

概して階級は地域的に集積する傾向にあることから、社会学の分析には欠くことができない。A.ギデンズ¹⁰が指摘するまでもなく、社会においては階級がどのように空間的に分化していくかといった空間分析が不可欠であり、空間分析は階級分析の一つの重要なファクターである。階級と空間の結びつきは限定的であるが、地域的に多様で時間がたつにつれて沈殿する傾向にある「階級文化」に着目するならば、階級と空間の分析が広がりを持ち、階級分析を構造化することができるであろう。

いま一つの問題として、グローバルなシステムの影響である。資本主義は本来、中心性と周辺性を内包している。階級・階層との関連でいうならば、資本主義のもとでは階級支配もまた中心性/周辺性という差異を明確にしながら周辺部を中心に包摂していく仕組みをもっている。この中心性と周辺性における優劣は、都市と農村という差異に置き換えることも可能であるが、都市とその周辺部といった限定的な地域における分化でみていくと、そこには中心性が周辺性を次第に包摂していくという枠組みを読み取ることも可能である。

資本制社会において住居地域が階級性を帯びるのは、

⁸ M. ウェーバー / 世良晃志郎訳：都市の類型学，創文社，1965/2005

⁹ 同上，p.77

¹⁰ A. ギデンズ：社会学理論の最前線，ハーベスト社，1989, p.227

政策的あるいは行政的に区分された結果というよりは、住居地域が市場的な価値をもち優先的に交通網などの都市インフラが整備され、住宅市場という資本主義の仕組みのなかに組み込まれた結果であるといえよう。こうした階級性を帯びた住居の出現は資本主義社会における階級構造の分析には、重要なファクターである。そこで繰り返し上げられる階級を軸とした空間は実際に居住区域という形で眼前に提示されるのだが、そうした分析に社会学的な枠組みが援用されたということはこれまでのところあまり見られない。

日本での都市研究としては、磯村英一や東京都の東京都市史編纂事業を中心とする、大都市東京の調査研究は数多く見られる。¹¹ しかしその視点といえば大正デモクラシーを一つの契機としての大衆の動向、庶民や貧困層を主な分析の対象としたものである。都市政策的な要請が常にあったのである。また、教育の歴史社会学的研究でも地域を扱ったものが多いが、それらは主に地方都市や農村を分析対象としている。時期区分的にも戦前期から戦後の高度経済成長期までの社会移動を扱った実証的研究が多い。しかしそうした地方都市を対象とした事例研究は、地理的、職業的および社会的地位の移動に関する研究が主であったため、東京などの大都市を中心とした階層文化およびそこでの文化の形成や、都市そのもののもつ文化の集約性や蓄積と継承といった分析視角では十分ではなかったといえる。日本においては階層文化と教育の社会学的研究は1980年代に興隆してきたものの、長期にわたる時系列的な実証研究の蓄積が十分とはいえないのである。

2. 近代化論における「空間」の検討

「近代性」とは産業革命によってもたらされた資本主義の敷衍をその特徴としている。一般にはこの部分が「近代」の見えやすい部分でもある。A. ギデンズによれば、それは第一に、戦争と結びつく産業化によってもたらされる脅威に始まり、これによってさらに「近代文化」ともなう環境は、上記とは対極にあるモダニティの、自我に働く再帰性に由来する、人格的《意味の喪失》の恐れをも生起させるものとされている。¹²

こうして人々の空間的経験のあり方そのものが変化し、物理的遠近の変化と親密さと疎遠さの間の複雑な関係のなかで、近代社会は出現し、次第に拡大するのであるが、それは概して時間軸によってとらえる傾向にある。勿論、西欧から周辺地域へと空間的な広がりをもっていくのであるが、時としてこうした時間の経過のみが問題とされ、それが出現した地域において、どれだけ「近代性」の要素が認められるかという議論のなかでは、それぞれの地

域的な差異が捨象されてきたのであった。すなわちそこで立ち現れる差異は、せいぜい地域的偏差の範囲内とされ、あくまでも「先進性」「後進性」といった概念によって、西欧を中心とする「近代的」制度や文化が周辺へと時間軸をもって敷衍していくという視点で、「近代化」がとらえられてきたのであった。そこでは「先進性」と「後進性」が、国家間では「先進国」「後進国」という二項対立図式に加えられ、「発展途上国」という、まさしく時間軸を表す概念が作り出されたのであった。こうした「先進性」「後進性」といった概念がさらに、中央(center)と周縁(periphery)という2項対立軸により、世界的にあるいは一つの国家においては、中央の制度、文化が次第に地方に広がりを見せるという近代化論の一つの重要な視点を提示しているのである。すなわち、時間的な早さを表す「先進」「後進」という時間軸の存在である。「近代性」とはある意味では時間という変数に置き換えられるといっても過言ではない。そうした「近代性」が今日において、近代化の初期段階では想定されなかったくらいの空間的な広がり、すなわちグローバル化のなかで、時間軸のもつ意味が極度に失われつつあるのである。¹³

こうした事態のなかで、時間軸に替わって人々の生活を直撃する場面という「空間」、生活空間という「場」のもつ意味が重要度を増してきたといえる。が、特に人々の生活空間といった「場」の理論を再構築する必要性を突きつけてきているといえよう。

本論の目的は、こうした「場」の構成要素としての文化が、時空間の拡大をとともなう「近代化」のなかで、階層文化を形成しながら、人々をその空間に位置づけていった過程を分析することである。

特に、今日では、われわれはグローバル化した文化環境や情報環境のなかに送られることが頻繁になっている。そうしたなかで、社会関係や情報交換は特定の時空間から切り離されたり挿入されたりしながら、「近代性」はローカルな場にも広がっていく。このように「近代性」の時空間は拡大していくが、これまでの近代化理論で捉えてきた時間を軸とした分析に加え、本論では空間を視野に入れ、具体的には地域性のなかに人間関係の抽象的システムの存在を析出してみたいと思う。さらに地域性とは近代的組織の集合性が格段に多く見られる大都市をその分析の中心に据え、都市空間の関係性のシステムを成す階層を取り上げて検討したい。

3. 「区域」という概念について

A. ギデンズは『社会理論の最前線』のなかで都市の社会学的分析において、極めて日常的でありながらも重

¹¹ 石塚裕道・成田龍一：東京都の百年，山川出版社，1986

¹² U. ベック・A. ギデンズ& S. ラッシュ：再帰的近代化，而立書房，1997

¹³ A. ギデンズ：社会理論の最前線，ハーベスト社，1989, p. 129

要な概念として「区域」の重要性を指摘している。A. ギデンズは「区域」という言葉の有効性について次のように述べている。

現代社会においては分裂と凝集の焦点となる三つの基本的な分割、すなわち階級、人種的分化、領土の要求の三つがあるといつてよい。三つは、それぞれ時間的・空間的に区域化されやすい。階級分割が区域の大規模な分割や都市における近隣の分配によって区域化されやすい特色をもっている…しかし、社会には文化的な意味をおびた区域があり、階級分割を弱めたり、あるいは逆に一層おしすすめたりする。¹⁴

M. ウェーバーが『都市の類型学』において述べているのは、西洋の都市が、古典古代から中世、近代にかけて、王政、門閥制、軍制、官僚制という何らかの政治的指標が与えられて、しきたりによって都市の秩序が維持されながら形成されたということである。しかしこうした都市の形態は、近代資本主義経済が持ち込まれた初期段階では、そうした都市に居住する新しい特権的身分をもつことが暗黙の条件とされ、市場経済が成熟するにしたがって、そうした秩序よりも市場的価値によって人々が居住地を選別するようになるということである。そしてその住居地は、かつての「身分」に代わる標識が付与されることによって、一定の纏まりある集団が移り住む地域として、次第に認識されていくのである。

A. ギデンズのいう「区域」という言葉は、現代社会の変動を前提とし、それによって社会システムの異なるセクター間および地域間において不均等が生じるのであるが、一方では、人々は前近代に比べて著しく自由度を増した社会移動によって、流動的に都市が形成され、近代初期の秩序によって特徴づけられるということを説明する上で有効である。このようにしてみれば、都市を所与として分析するのではなく、萌芽期よりその発展の過程をあとづけるための概念として「区域」という日常的な言葉の重要性が一層浮かび上がってくるのである。さらにこの「区域」という言葉にはそこで繰り広げられる人々の相互行為をも分析の視野に入れることを可能にしているといえよう。¹⁵

4. 日本における都市社会学研究

日本における近代社会としての要素を備えた住居区分という概念は、1910年代以降に近代資本主義が本格的に日本に移入された大正期に都市部において形成されたといえよう。この大正期には、明治期とは異なる社会移動の形態が現れ次第に加速していった。すなわち近代セクターに働く組織的従業員や専門職に属する人々が、新

しい支配層となり、近代的空間の主演となって新たに開発された区域に住み始めたのであった。そこでは新しい生活様式とともに特徴ある空間を作り出し、それらが今日にまで、継承されている。彼らが形成した生活空間は、政治的な要素が前面に出ていた近代化初期とは異なり、教育や文化や消費生活を軸とし、前近代の共同体の絆を断ち切り、代わりに血縁関係と家族相互の愛情や絆を重視する人々、すなわち、E. ショーターのいう「近代家族」¹⁶によって形成されたものであった。

日本における「新中間層」は1920～1930年代に主に東京などの大都市の郊外で形成されていったと考えられる。東京の都心部にはすでに前近代より残存する身分文化をもつ人々が、身分の異なる人々とも部分的に混在していた。実は前近代社会においてはこうしたことに人々が違和感を持つことはあまりなかった。それに対して新たに形成された新中間層の人々は、こうした混在を避けるかのように、郊外の特定の「区域」を求めて中心部より移住していった。したがって文化的には中心的な要素を持ち込み、それを地理的には周辺部分で実現していったのであった。

その一つの契機となったのが、大正12(1923)年の関東大震災であった。その震災後の復興事業は、まさに資本主義社会の初期的な階級形成過程のなかで行われたといつてよい。東京市の都市計画としては、交通網の整備や住居の区割り、大量輸送を想定した輸送機関と道路の整備とともに、住居と商業地区、行政地区といった区割りのもとで都市計画が行われ、郊外の住居専用区域の整備とともに、中心部からの大規模な人口移動という空間的变化が、新たに興隆してきた新中間層の生活様式、価値意識や規範を、そっくり郊外という新しい「区域」へと広げていったのであった。そこには伝統的文化と切り離れた形での階層文化が形成されたのであるが、それらは明らかに西洋の文化都市をモデルとしていた。東京の西部の丘陵地に延びる住居専用地域には、文化施設とともに学校、病院、教会などが配置され、一種独特の空間を作り出していった。

その構成員である新中間層に属する人々は、前近代的な属性とは切り離され、近代社会における業績主義によって地位を獲得していった人々であった。彼らの地位は自身の業績——なかでも教育歴はかれらの職業的地位を決定する重要な指標であった——によって獲得したものであり、それに付随する生活レベルと様式を確実に子孫へと継承させるには、学歴の獲得が最も確実な方法であることはよくわかっていた。そこで、新中間層の家庭では、親世代の子世代に対する教育アスピレーションと

¹⁴ A. ギデンズ：社会理論の最前線，ハーベスト社，1989，pp.248-249

¹⁵ 同上，pp.248-249

¹⁶ E. ショーター：近代家族の形成，昭和堂，1987

なって現れ、この階層の教育熱を高めていったのであった。

こうしてみれば、日本の近代化にともなう階層文化の形成は、近代初期の明治期の身分制の崩壊という近代に向けての大変動後、数十年を経た大正期から昭和初期にかけて、東京の郊外を中心に展開され、それはさらに東京対地方という枠組みにおいてこの東京という特別の「区域」の標識を明確にしていっていったのであった。

こうして政治、経済の中心地である東京は、同時に教育、文化の中心地として、そこに住む人々に特有の階層文化を創りだし、それが時間の経過とともにその空間に堆積され、継承されていくプロセスを準備していたのであった。やがて日本の近代化、すなわち西洋化は中央(center)である東京を発信地として、周辺(periphery)である地方に伝えられた。このように大正期から昭和前期は関東大震災を経て昭和初期の東京市街拡大期に時期を同じくして形成され、その東京という指標を中心に繰り広げられたと考えられる大都市郊外の「新中間層」および「上流階級」¹⁷の教育戦略が、現代の日本社会における「近代家族」の生活様式や価値意識の原初形態となり、その発信元としての階層文化を創出していったといえる。

5. 近代日本における都市、階級・階層と教育

こうした過程を、近代化初期の日本のある集団の家族において跡付けてみよう。タキエ・スギヤマ・リブラはその著『近代日本の上流階級』において、華族の住居の分析において、その住居地が極めて東京に集中している事実を数値で明らかにしている。

現代の日本においても、かつての華族を出自とする世帯の、東京居住率は57.0%にのぼっている。東京に人口が集中しているといっても、東京都の人口比率は日本の人口の11.9%を占めているにすぎない(自治省行政局1984年)ことからすれば、元華族の世帯が現在でも東京都に居住している比率は極めて高いといえる。

こうしたことは、明治維新による天皇家、公家が東京に移り住んだという歴史的事実によって自明のこととされている。確かにそうした事実はあったにしろ、長年暮らしていた京都に比べて東京が著しい優位性をもっていたからに違いない。また、華族のうち公家を除けば、旧幕藩体制の藩主であり参勤交代で江戸に滞在することが江戸時代より当然のこととされていたにしろ、いわゆる国元よりもその家族や一族の多くが東京を居住地として選んだということの意味する。

東京が首都として特別の意味があったとして、東京に

隣接する神奈川県でも同様のことがいえる。神奈川県は人口は全人口の6.5%であるが、華族の16.7%が神奈川県、特に神奈川県東部に居住している。ここは、関東大震災や東京大空襲で本宅から焼け出された華族たちが別荘としてもっていた鎌倉や大磯といった湘南区域を意味する。災害によって避難しそのまま移り住むようになったことによるものであるが、そうした事実そのものが、その地域が特権階級が住む区域としての標識をもっていたということである。そこは、現在に至るまで、いくらかは主役が交代しても変わらずに「区域」の標識を今日にいたるまで発信し続けているのである。

タキエ・スギヤマ・リブラによれば現在『華族家系大成』によって住居が確認できる、総数916世帯の旧華族層は、その73.7%が東京都と神奈川県に居住しているが、この二つの地域は日本の人口比率のなかで18.4%を占めるに過ぎないことからしても、華族層がいかにかこの地域に集中しているかがわかる。タキエ・スギヤマ・リブラは『近代日本の上流階級』において、元華族の人々への聴き取りをした結果、次のように述べている。

山の手地域には支配階級の邸宅である武家屋敷や大名屋敷のイメージがある。元華族は、何度も転居したにもかかわらず、以前ほど密度は高くないにせよ、現在でも「高い町」の一等地に集中して住んでいる。戦前はこのような住居地の地理的な集中が一層際立ったものであったろうことは、華族が言及していた彼らの昔の住所から推測できる。最もよく話の中に出てきたのは、明治時代の一五区制の東京市の中の二区、麻布と赤坂であり、この二区が旧山の手地区の中心部だった。¹⁸

A. ギデンズによれば、前近代の文化は、時空間の拡大の度合いは相対的に低いだが、そこでは《場所》という観点から確立された《局所化された関係》は極めて重要性をもつという。¹⁹こうした「場」のなかで繰り広げられる人間社会の関係は、「近代文化」がもつ「信頼をともなう環境」が、次第に「親密さのイデオロギー」²⁰となり、われわれの人間関係にある意味で拘束することにもなる。A. ギデンズは、そうした行動規範は、「1. 社会的きずなを安定化させる手段としての、友情や性的に親密な《対人的関係性》。2. 時空間の無限の拡がりを超えて関係を安定化させる手段としての《抽象的システム》。3. 過去と現在を結びつける様式としての《反事実的》未来志向的思考。」²¹を醸成する環境を提供するという点を強調している。こうした「場」がいかなる契機に

¹⁷ 以降、本論ではこの「新中間層」と「上流階級」を「中上流階級」として扱うこととする。

¹⁸ タキエ・スギヤマ・リブラ：『近代日本の上流階級』世界思想社、2000、pp.74-75

¹⁹ A. ギデンズ：『社会理論の最前線』ハーベスト社、1989、pp.127-128

²⁰ R. セネット：『公共性の喪失』晶文社、1991

²¹ A. ギデンズ：『社会理論の最前線』ハーベスト社、1989、p.129

よって出現し得るか、まさに「近代性」における「空間」分析の重要性がここにある。

5章. 階級文化と教育の歴史社会学的分析視角

以上、先行研究をもとに大都市のもつ階級の集積作用について検討したが、実際に日本における大都市中上流階級の階層文化の形成過程をたどるならば、かれらの文化形成の中心となった教育、なかでも学校に着目することが一つの方法であろう。

たとえば、西洋的教養を特徴とするこれら中上流階級の階層文化の形成に寄与し、今日に至っても「進学名門校」として存続しているいくつかの伝統的な学校に着目することである。特に小・中・高等学校一貫教育のなかで確実に女子に高等教育の機会を提供し、日本における女子の学歴取得競争の一端を成した、都市型の私立の中高一貫校はどうであろうか。こうした学校は、おもに、東京の南西部、すなわち旧東京市の麻布区と赤坂区から神奈川県横浜市、さらに湘南地区にまたがる「区域」に帯のように点在し、その区域に住む、旧華族層や、大正期以降の新中間層の子弟がしばしば通う学校としてもその名が知られている。ただし、この時代の「中間層」は、中間とはいえ、その生活様式や生活レベルは上流階級に近いものがあり、この両者は重なり合う部分も多いので合わせて本論では「中上流階級」として分析をすることとする。

こうした大都市における階層文化と教育についての研究は、P. ブルデュー & J.C. パスロンが、すでに1970年代に、フランスのパリに居住する人々の、地方都市に対する優位性について実証的な研究を積み重ねてきた。彼らは次のように指摘する。

パリに居住していることと、教養ある階級に所属していることのように、非常に違った性格の特権であっても、ほとんど常に〈学校〉や文化にたいする同じ姿勢に結びついているのは、それらが事実上つながりあっていて、まさに特権という事実に通根をもっている価値観への支持を助長するからであろう。²²

6章. 再生産論と正当化理論の歴史社会学的分析視角

階級・階層文化の研究において常に問題とされるのは、実際に所属階級・階層によって個々人の社会的地位達成に不平等が生じるか否かということにある。すなわち出身家庭の教育的、文化的環境が、階級・階層的な不平等を生む社会的要因としてはきわめて大きいのではないかということである。

高等教育の進学の規定要因としては家庭の経済力が大きいとされるが、そうした経済的平等化がもし実現されたとしても、高等教育進学の規定要因は完全には解決されないであろう。大学進学には本人の能力や経済的要因以上に、親の学歴、親の職業的地位による規定要因が大きいことは、すでに日本における教育社会学の研究者による実証的研究で明らかになっている。

P. ブルデュー & J.C. パスロンは、フランスの政治、経済、文化的エリートを輩出するグランド・ゼコールの学生の出身階層を調べた結果、その所属階層が極めて高く、その父親の職業をみれば、官吏、医師、弁護士、高級技術者などの専門職、大企業経営者、大学教授、外交官、作家、芸術家などで占められ、さらに主にパリに在住しているこれらの学生の親の学歴は相当に高いことに着目した。すなわち文化的環境に極めて恵まれているのであった。彼らは最難関といわれるグランド・ゼコールの試験を突破したことによって、その能力の高さを証明しているのだが、その試験に到達するまでの過程がたして自身の能力と努力によるものだろうか。特にグランド・ゼコール準備学校の授業料が極めて高いこと、また、その前段階としてパリの私立の名門リセへの通学が必要であることからすれば、一定の収入がある家庭、あるいは、そうした学歴取得に高いアスピレーションをもって臨むことのできる家庭、なかでもパリ在住者に極めて有利ということはないであろうか。これらのことは、漠然ととらえられてはいたが、P. ブルデュー以前には実証的に明らかにされることはなかったのである。先進社会とされるフランスにおいて、その高等教育制度はP. ブルデューらが言うように「社会的特権を生まれつきの才能や個人的功績へと転換することによって、不平等を正当なものとして認定することをやめないといった事態」²³となっていたのである。

こうした特権階級が、地方よりも首都圏に集中する傾向は日本でも顕著にみられる。すでに戦前期において、地方に生産手段を所有していた多くの特権階級も、次第に子女の教育を、教育機関が整った東京で受けるために移住し、それを契機に次々とその一族も、進学に有利な情報が得られる首都、東京に移住し生活拠点を全て東京に移転した例が少なくない。また、日本における最上流階級といわれる旧華族の東京在住率は他の集団に比べて極めて高かったことも先の統計に示されていることから、上位の階層ほどこうした傾向にあったことがうかがわれるのである。

東京に中上流階級が集住した歴史的経緯としては、明治維新によって、行政機関や経済活動の拠点が東京に集中したこともさることながら、教育機関、特に大学を始

²² P. ブルデュー & J.C. パスロン：遺産相続者たち、藤原書店、1997、p.47

²³ 同上、1997、p.49

めとして専門学校や研究機関そして最先端の医療機関がここに集中したことにもよるであろう。こうした大都市の重層的な構造のなかで形成される文化を教育制度を介して正当化しながら継承していくのが、特定の社会集団の戦略的行為であったといえるのではないだろうか。彼らは、東京に住むことによって、さらに文化的資本を蓄積させることができたのである。それは具体的には家庭が所有する書籍や美術品、ピアノ他の楽器などの文化的な客体に関するものから、趣味や嗜好、教養ある会話や身のこなし方、言葉使いも含まれるのである。それらは短期間で習得できるものではなく、慣習行動として、家庭の文化的な環境のなかで、家族間の日常会話によって醸成されるものであり、P. ブルデューの言葉を用いるならば、「ハビトゥス」である。

こうして学歴によってその地位を獲得できた新たな特権階級は、文化資本を蓄積することによって、その子弟にあたかも遺産のように、社会的に意味のある資本を継承させていくのである。彼らは、高等教育への接近の容易さ、特に威信の高い高等教育機関への入学という事実によって、本人の能力の高さを証明し、卒業後には親世代と同様の特権的地位を獲得するのである。

演劇、音楽、絵画など、どんな文化的領域で調べてみても、出身階級の高い学生ほど豊かで幅広い知識をもっている。楽器の演奏とか、劇場通いで見た映画・演劇の知識、コンサート通いで得たクラシック音楽の知識などに関して大きな格差が見られるのは、階級の文化的慣習と経済的要因とがここでは相乗効果を発揮しているのであってみれば、全く驚くにはあたらない。²⁴

このように単に嗜好のレベルに止まらず、高等教育機関、なかでもフランスで最もレベルが高いとされる、エコール・ノルマル・スペリエールやエコール・ド・ポリテクニック、エコール・デ・ミンヌという、将来は政界、経済界の指導者や大学教授、文筆家などの登竜門とされる学校の選抜試験で、選抜の基準となり、さらには官僚の試験においても評価の対象となる。いうなれば、学力として現れるものが、実は文化的に相続された遺産であり、さらには彼らが所属する集団の社会的関係をとまなう場合も多いことから、あたかも属性のように次世代に相続されるのである。したがって次世代にとっても高等教育へのアクセスが容易となり、特権的な地位が代々、受け継がれていくことは明らかである。

まさに「錬金術」のように「個人の功績へと変貌」し、

庶民階級が学校的成功を得るのとは全く異なる意味を付与しながら、確実に経済的地位と社会的地位を保証する。ここに、こうした中上流階級の子弟が苦労なく更なる成功をもたらす仕組みとなるのである。²⁵

通常はブルジョワ出身であるがゆえに得られる文化的優位性が、パリに居住していることでいっそう強化されることを念頭に置かなければ、あらゆる特権をあわせもっているパリのブルジョワ学生たちが他のどんな学生よりも、鷹揚や勉学にたいする超然たる姿勢（そこには知的な成熟ぶりが見てとれる）を示すことができる…²⁶

グラント・ゼコールの学生の出身階層を分析したP. ブルデューは、学生の出身地に顕著な偏りがあることに着目した。自宅通学している学生の比率は、農民や生産労働者の子弟については10%から20%のあいだであるのに対して、上流階級出身の学生については50%から、時には60%にもものぼっている。²⁷ このことは、農民や生産労働者出身学生が地方の出身者であるのに対して、上流階級出身の学生が首都のパリ出身者であり、その恩恵を多く受けていることを示す。こうした家庭の文化的環境の差異は、階級間で有意な差となって現れるのである。すなわち自宅通学の学生は金銭的な面でも学業以外に遣える割合が多く、一層、文化的な投資において地方の農民や生産労働者との格差を生みだしていたのであった。

7章. 日本の中上流階級の事例への分析視角

1. 中上流階級の階層文化

再度、日本の中上流階級に目を向けてみよう。タキエ・スギヤマ・リブラは戦前期から現代にいたる日本の上流階級の身分文化の習得と伝達について旧華族層からの聴き取りをもとに次のように述べている。

たいていの華族の家庭では、親密さよりも地位による隔たり、一体感よりも分離されているという意識のほうがまさっていた。…親が家族の間に親密な雰囲気を用意的に作りだそうとする例もあった。…平均的な華族世帯は、外国で教育を受けたり仕事をした経験があり、社交の席や仕事の上で外国の要人と頻繁に接触があったため、他の社会階級の家庭と比べて、生活様式の一部が非常に西欧化していたという事実である。²⁸

このように、華族を中心とする日本の上流階級が、その出自が封建的な身分制度によって形成されたにもかか

²⁴ P. ブルデュー & J.C. パスロン：遺産相続者たち，藤原書店，1997, p.33

²⁵ 同上，p.128

²⁶ 同上，p.88

²⁷ 同上，p.25

²⁸ タキエ・スギヤマ・リブラ：近代日本の上流階級，p.195

ならず、日本の文化とは切り離された、極めて西洋的な文化を持っていたことが明らかにされている。そして家族内の関係をみれば、家父長的な日本の家族形態に対して、上流階級では、母親が家庭内で一定の権威をもって子どもに接し、父親とは異なる役割をもっていたという点でも西洋的であったというのである。

華族が他の階級ときわめて対照的なのは、実は母親の役割だった。平民、特に中流家庭では、性別分業がはっきりしており、母親は身体的に近く、感情的に温かい存在だった。…母親は、父親の役割りを補完するとともに均衡をとる役割りを果たし、しかも必要な場合には父親の権威主義がいきすぎないよう子どもを守るそこそこの自律性をもっていた。²⁹

上流階級の家庭において、女性は概して母親としてよりも、妻としての役割を果たすことが求められた。夫とともに重要な客をもてなし、夫の職業上、海外へ夫妻で赴任することもあったのである。

夫は、その当時、海軍士官学校の専攻科学生でした。大尉でした。…夫の妻への条件というのが、英語が出来て、音楽が出来る女性ということでした。…夫は旅行好きで、公私有交せて、結婚前、22回も外国旅行しています。結婚後も幾度も外国旅行しました。私も同伴して色んな所へ行きました。…卒業後、職に就いたということはありません。主婦業にいそしみました。といっても家事はしませんでした。…家事をしなかわり、先生について勉強をいたしました。夫が、英語の能力を重視してくれたのです。(1921年頃の回想)³⁰

こうした関係は次第に華族以外でも見られるようになっていった。近代化にともなう官僚制の発達により新たな上流階層が出現したのであった。それらは官僚、軍人、医師、外交官というように、学歴や職業資格によって達成されるべき職業に就く人々であった。明治期におけるこれらの人々の収入は相当に高額であり、明治以前の上級士族のそれを彷彿させるものがあった。

父は、官吏職についていました…。女中さんが最低2、3人はいつもおりましたし、一番栄えた頃はおかかえの車夫も3人いました。…私の上には姉が3人おまして、4人姉妹だったのですが、父が一番上の姉を除いてみな海外に留学させました。経済的にも余裕があったからこそできたことなのでしょうが、父はこれからは女といえども国際人にならなくてはいけない、といつも言っ

ておりました。かといって、今はやりのウーマン・リブを奨励しているわけではなく、女は早く結婚して家庭に落ち着くべきだ、とも思っていたようです。…父は、郷里から前途有望な若者をひきとって勉強させ、ゆくゆくは、娘の誰かと結婚させようと考えていたようでした。(1917年頃の回想)³¹

家庭内において上流階級の女性たちは子女の教育、特に女子については夫に依存しない教育的権限を持っていたようである。また、子どもに対しては、例えば進学などは子ども自身の選択を尊重していたという点では開明的であったといえる。

母は東京生まれで、女学校までは出た人でしたが、出来たなら大学までゆきたかったとよく言い、残念がっていました。そのせいかわたしたちにも「学校はゆきたい所まで行っていいですよ。」と言っておりました。(1923年頃の回想)³²

このように中上流階級でも、職業上、海外赴任や出張を経験し、西欧文化の影響を受けたエリートたちが、その子女にも西欧的教養を身につけることを重要視し、それを教授する学校に子女の教育を託すようになっていったのである。

2. 中上流階級の学校選択

では中上流階級の家庭では実際にどのような学校選択がなされたのであろうか。男子の場合、明治期には華族たちの子弟がその身分文化の習得という観点から通う学校がいくつか存在していた。それらは西欧的な寄宿舎をもち人格教育も行う将来の特権階級を育成するための学校であった。

中等教育段階の華族の子弟は、週末や長期休暇以外は家を離れて寄宿舎で生活する場合があった。学習院は男子生徒を対象とした寄宿学校だった。また、上流階級の子弟が在学していた暁星学園のような一部の私立学校も同様だった。³³

皇族や華族の子弟の教育を担っていた学習院の教育がどのように評価されていたか、また、女子の教育についてはどのような選択肢があったのであろうか。

学習院が学業面で、あるいは校風として、男子には生ぬるいと考えた親もあれば、リベラルで国際派の親は、同校を軍隊的すぎると考えた。…学習院について様々な評価があったことは、学習

²⁹ タキエ・スギヤマ・リブラ：近代日本の上流階級，p.198

³⁰ 青井和夫編著：高学歴女性のライフコース，勁草書房，1988年，p.292

³¹ 青井和夫編：高学歴女性の生き方，津田塾大学，1980年，6-1（冊子整理番号）

³² 地域社会研究所：高年齢を生きる—お茶の水出の五十年，国勢社，1975，p.41

³³ タキエ・スギヤマ・リブラ：近代日本の上流階級，世界思想社，2000，p.216

院に代わって入学先として選ばれた学校が多岐にわたっていたことからもわかる。東京府立の中学校や東京高等師範学校付属のように、学力が高く競争の激しい学校から、暁星、慶応、成蹊、ミッション系などの私立校まで、様々だった。³⁴

こうした上流階級の期待に応えるために学習院でも次第に西欧の語学や教養を重視するようになるが、より高い学力を要求する親、あるいは本人の希望により、上流階級の身分文化を教え込む学校よりも、近代セクターの職業に所属する新中間層の子弟の通う学校を選択するようになり、さらに熱心な家庭では、外国人の家庭教師による自宅学習に力を入れ、また西欧的教養を確実に習得させるために海外留学をさせることもしばしばであった。³⁵

上流階級では女子もまた、聖心、東京女子高等師範学校附属、双葉学園、女学館、森村学園、自由学園などに入学した。³⁶ 明治期より華族の子女の教育を担ったのは華族女学校（女子学習院）、跡見学園などであったが、聖心女子学院をはじめとする女子ミッション・スクールも選択肢となっていた。特に外交官や海外赴任者の子女たちは寄宿舎をもつミッション・スクールを選択する傾向にあった。ミッション・スクールにおいては、外国人教師による音楽、英語の授業や、上級学校への進学を有利にする高いレベルの英語、数学が教授され、また、学問以外にも西欧風のマナーや生活習慣を含む教養を授けることから、ミッション・スクールがより好まれたものと思われる。一方で官立の東京女子高等師範学校付属などの学力レベルの高い学校も選択肢となっていた。

ミッション・スクールをとりまく状況としては、昭和初期の日本基督教教育連盟の調査に基づく方針により、各学校においては組織強化の機運が高まっていたことが挙げられる。青山女学院などでは、小学部を設置するとともに女子専門部を附設し、初等教育から中等教育、高等教育を接続するエスカレーター校が出現するようになった。これによって幼年からの一貫教育が可能となり、都市上中間層の子女の教育機関として、こうした学校が、中上流階層のさらなる支持を得るようになっていくのであった。³⁷

8章. まとめと今後の課題

本論では、階層文化と教育についての理論的検討をするとともに、日本における都市中上流階層（upper middle class）の階層文化と教育の関係を示す事例を検

討した。

このなかで、タキエ・スギヤマ・リブラの日本の華族集団を対象としたエスノグラフィ的研究は、これまで欠落していた日本の上流階級の身分集団の文化を描き出すことに成功したといえよう。こうした事例からいえることは、すでにP. ブルデューやA. ギデンズが指摘していたことではあるが、先進社会とされているイギリスやフランス、さらには業績主義の典型とされるアメリカにおいてさえ、前近代社会から何世紀にもわたって世襲されてきた身分が今なお存在していることからみても、いかに近代的制度が整備されても、特権的地位にある集団は、子の世代に継承可能で世襲的ともいえる隠れた制度を、依然として巧みに作り出しているといえよう。

官僚制の発達や科学技術が進展すれば、より高い学歴を取得することが社会的地位の獲得には確実な方法として認識され、そうした地位を主に占める中上流階級では、その子女に対しては、当然のことながら高い学歴を求めようになるのだが、これまでの日本における階級・階層研究では主に下層階級からの上昇移動の部分に焦点が当てられていたため、中上流階級を対象とした研究がほとんど行われてこなかったといえる。しかし、前近代社会から地下水脈のように継承されてきた中上流階級が、今日でも階層構造の上位を占めている可能性が十分にあり、それを検証するには、彼らの職業的地位と学校選択および居住地を変数として、より一層の量的および質的分析を行う必要がある。それは今後の課題としたい。

* 本研究は日本学術振興会平成18～20年度科学研究費補助金基盤研究（C）
課題番号18530660「近代日本における都市上層・新中間層の階層文化と教育の実証的研究」の成果の一部である。

【参考文献】

- 天野郁夫：近代日本高等教育研究，玉川大学出版会，1989
 天野正子編：女子高等教育の座標，垣内出版，1986
 青井和夫編著：高学歴女性のライフコース，勁草書房，1988
 麻生誠：大学と人材養成，中公新書，1970
 Beck,U., Giddens,A., &Lash,S., 1994, 松尾精文他訳：再帰的近代化，而立書房，1997
 Bourdieu,P. 1979, 石井洋二郎訳：ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ，藤原書店，1990
 Bourdieu,P. et Passeron, J-C.1970, 宮島喬訳：再生産，藤原書店，1991

³⁴ タキエ・スギヤマ・リブラ：近代日本の上流階級，世界思想社，2000, p.224

³⁵ 同上，p.232

³⁶ 同上，p.232

³⁷ 佐々木啓子：女子ミッション・スクールの階層文化と教育，教育社会学会第55回発表要旨，2003
 ——：戦前期女子ミッション・スクールの進学構造，教育社会学会第56回発表要旨，2004
 ——：戦前期青山女学院の階層文化と教育，教育社会学会第57回発表要旨，2005

- 1964, 石井洋二郎監訳：遺産相続者たち, 藤原書店, 1997
- Bourdieu,P. et Luc Boltanski, 1975, 森重雄訳：教育システムと経済—学歴=資格と職業, 現代思想No.13-12, 1985
- Giddens,A. 1979. 友枝敏雄他訳：社会理論の最前線, ハーベスト社, 1989
- Giddens,A.1973. 市川統洋訳：先進社会の階級構造, みすず書房, 1977
- 石塚裕道・成田龍一：東京都の百年, 山川出版, 1986
- Libra, Takie Sugiyama, 1993, 竹内洋他訳：近代日本の上流階級, 世界思想社, 2000
- 佐々木啓子：戦前期女子高等教育の量的拡大過程, 東京大学出版会, 2002
- ：女子ミッション・スクールの階層文化と教育, 教育社会学会第55回発表要旨, 2003
- ：戦前期女子ミッション・スクールの進学構造, 教育社会学会第56回発表要旨, 2004
- ：戦前期青山女学院の階層文化と教育, 教育社会学会第57回発表要旨, 2005
- Sennet,R. 1977. 北山克彦他訳：公共性の喪失, 晶文社, 1991
- Shorter,E. 1977,田中俊宏他訳：近代家族の形成, 昭和堂, 1987
- 地域社会研究所：高年齢を生きる—お茶の水出の五十年, 国勢社, 1975
- 東京市役所：東京市郊外に於ける交通機関の発達と人口の増加, 1927
- Weber,M. 1921,世良晃志郎訳：都市の類型学, 創文社, 1965